

平成25年9月5日

清水町議会議長 加 来 良 明 様

清水町議会産業厚生常任委員会  
委員長 中 島 里 司

## 所管事務調査について

常任委員会活動として行う所管事務調査について、このたび調査を終えたので、その結果を下記のとおり報告いたします。

### 記

1. 調査事項 バイオマス計画について

2. 調査期日 平成25年7月30日

3. 調査の結果

#### 【十勝バイオマス産業都市構想】

平成25年度から平成34年度までの10年間（中間年で見直し）を計画期間として、十勝19市町村での構成により策定された、十勝バイオマス産業都市構想について、担当課から説明を受けた。

十勝の農・食・エネルギーの自給社会の形成を目指した計画で、十勝の農業は北海道の他地域や都府県と比較して、圧倒的な農業生産と規模を活かしたバイオマスの循環活用が可能となっている。こ

の特徴を活かして、地域産業政策「フードバレーとかち」を推進し、新たな産業・雇用の創出を行い、持続的な地域経済の確立を目指している。

十勝では地域内での循環型の農業構築が進んでおり、豊富なバイオマスの賦存量を背景として、バイオガス、バイオエタノール、バイオディーゼル、木質チップなどのエネルギー活用が次々と進められている。

現在、十勝のバイオマスの現状としては、既にバイオマス資源の約 87%が活用されて、高い利用率となっており、同構想では 10 年後の利用率の目標を 94.5%としている。

これからの課題としては、原料の収集について効率的に収集するための方策や、施設整備とランニングコストの低コスト化、原料生産からの収集・運搬・製造・利用までの事業者の連携による一体的なシステムの構築があげられる。

将来的には、再生エネルギーの導入を促進することにより、CO<sub>2</sub>の排出削減とエネルギーの自給が可能な環境に優しい地域循環型の社会を目指すこととして、同構想が策定されている。

十勝のバイオマスの推進状況については、十勝 19 市町村のそれぞれの特徴を活かした計画が立てられているが、清水町では、平成 20 年 9 月に「清水町バイオマスタウン構想」、平成 25 年 3 月に公表している「清水町バイオマス活用推進計画」により、バイオマスの活用と推進が計画されている。

#### 【鹿追町環境保全センター】

バイオマスを有効活用した地域内資源循環に取り組み、家畜ふん尿処理施設としては日本最大規模の「鹿追町環境保全センター」の視察調査を行った。

同センターは、バイオガスプラント・堆肥化プラント・コンポスト化プラントの三つの施設で構成されているプラントである。

プラントを建設するに至った理由の一つとしては、鹿追町は農業のほかに、観光を町の主要産業として位置付けていることもあり、

市街地付近にある牧場からの臭気対策として計画が始まったとのことだった。

プラントの稼動が始まった現在は、懸案だった臭気対策も達成され、プラントから排出される消化液を活かして、化学肥料の使用量を削減した農作物の生産や減農薬による水質保全の向上が期待されている。

鹿追町では、プラントの稼動による排熱を利用して、様々な取り組みを商工業者などと一体になって実証試験を行っている。

その一つとしては、温暖な地域で生育する果実の生産試験や温暖な地域に生息する魚を成育させる計画もあり、一つのプラントから多くの経済効果をもたらす施設としても鹿追町では新しい町づくりの拠点として期待している。

バイオガスプラントの普及のためには、国や北海道などの各省庁の協力の他に企業メーカーの協力も必要不可欠となってくる。課題としては、プラントの建設費用と稼動するためのランニングコストの軽減が急務であり、複数の畜産農家が利用組合を作って稼動させる集合型の施設のほかに、飼養頭数が少ない畜産農家においても採算が取れるようなプラントの建設開発が望まれている。

本町においては、乳牛の飼養頭数は一農家あたり平均150頭程であるが、単独でも低コストで建設できるプラントの開発をすることが、よりバイオマス計画の成功に近づけるものと考えられる。

今後もバイオマスの取り組みについては注視する必要がある、地域環境にも配慮した耕畜連携型循環農業の確立を目指していかなければならない。